

第一章 新・婚約者の先輩美少女

透は腕を組んで現在の状況について考え込んだ。

ここは透の自宅。近衛家から与えられた一軒家だ。

そして、休日の朝、普通に朝食を食べているだけなのだが……。

「はい、あーん♡」

ネグリジェ姿の愛乃が嬉しそうな表情で、透の口に箸で厚焼き玉子を運ぶ。

しかも、メイド服姿の知香と明日夏がじつと見ている中だ。

知香たちの視線が怖いのが、拒絶するという選択肢はない。

相手は透のいちばん大事な愛乃だからだ。

透がばくつとくわえると、愛乃が「えへへ」と笑う。

「朝からラブラブだね！ わたしたち！」

「そ、そうだね。愛乃さんは俺の彼女だから……」

そう言うのと、知香がジト目でこちらを睨む。

明日夏が頬を膨らませながら、口を挟む。

「それ、あたしが作ったんだけど」

「ありがとう。桜井さん。すごく美味しいよ」

実際、明日夏の料理は美味しかった。知香も名家でみっちり花嫁修業しているから、当然料理は上手だ。

ただ、明日夏はより家庭的な印象がある。というより、高校生男子の好物にフォーカスしているからか、夕飯は揚げ物とかで確実に透の胃袋を奪ってくる。

透に褒められて、明日夏は満更でもなさそうににやにやとする。

「あたしが毎日、透の朝ご飯を作ってあげる！」

「いや、それは桜井さんが大変だから、俺も作るよ」

「連城^{かんじょう}って料理できるんだ？」

「最近はしていないけど、もともとは一人暮らしだし……」

そこに横から知香が口を挟む。

「その必要はないでしょう？ 透のご飯は私が正妻として一生作ってあげるんだから！」

明日夏がこの家のメンバーに加わるまで、料理は主に知香が作ってくれていた。ときどき外食したり出勤を取ったりするとはいえ、大変なのではないかと透は心配していたけれど、知香は楽しそうだった。

透と離れていた時間が長いから、透と一緒にいられるのが嬉しい。知香は以前、そんなことを顔を赤くして言っていた。

愛乃、知香、明日夏が透のことを大好きで、奪い合っている状態。

これはこれで他の男からしてみれば、羨ましいのかもしれないし、実際、透も悪い気はしな

い。

しないのだけれど……。

（みんなの気持ちは嬉しいけど、愛が重い……！）

愛乃や明日夏は透を独占しようとしているし、ハーレム路線推しの知香でさえ自分が「正妻」になるなんて言っている。

当然、全員の好意をそのまま素直に受け止めるわけにはいかない。

透の彼女は愛乃なので、もちろん、愛乃が一番大事なのだけれど。

他の二人の嫉妬が気になってしまう。

どうしたものか、と透は考えていた。今のところ、四人で仲良く暮らせているけれど、いつ状況が変わるかもわからない。

水無瀬真衣という北欧系美少女が現れたときも、この均衡は崩れそうだった。何なら最近では真衣も透と一緒に家に住みたいと考えている節がある。

もつとも、真衣にはちゃんとした両親がいるから、そんなことは許されないとは思うけれど。考え事をしながら食事を進めていたら、野菜炒めのケチャップが口元についた。愛乃が即座に透の口の汚れをティッシュで拭く。

「透さんの彼女で婚約者のわたしの役目だよな」

むむつと知香が愛乃を睨み、明日夏も羨ましそうに眺めている。

愛乃はそんな二人の様子を気にもしていなさそうだった。

「わたしも料理、最近頑張っているんだよ？ 知香ちゃんのおかげでだいぶ上達したし」

前から知香は恋敵のはずの愛乃には親切で、料理も教えてあげていた。

知香は照れたように目を伏せる。

「私は愛乃さんと一緒に透を支えるつもりだもの。愛乃さんには頑張ってもらわないとね」

知香は愛乃に友情を感じていて、透と愛乃、自分でのハーレム計画を考えている。だが、愛乃と知香のどっちが主導権を握るかは決まっていないうし、明日夏をどう扱うのかも未定だ。

だいたい、そんなことを近衛家が許すかどうか。

今の状況を時枝冬華……つまり、近衛家の秘書は容認している。

いつそれが変わるかはわからないが。

明日夏が対抗するように、隣にいる透に突然、胸を押し当てる。愛乃や知香に比べれば小ぶりだが、しっかりと女性らしさを感じさせる。しかも布地が薄いメイド服だからなおさら。

こんなふうに距離が近くなつたのは最近のことで、明日夏も愛乃・知香に負けないように対抗しているのだ。

「連城の一番大事な女友達はあたしだよな？」

「俺も桜井さんの友情に応えられるような人間にならないとね」

明日夏は成績優秀、容姿端麗、スポーツも万能な人気者だ。それでも知香に一步及ばないことが多くて悔しがっているけど、フレンドリーな雰囲気から男子人気は知香より高いかもしれない。

そんな明日夏は昔からずっと透に友達として接してくれている。
明日夏がにまーと笑う。

「あたしは今のままの連城が好きだよ」

直球で言われ、透はドキドキしてしまう。

だが、透は変わらないわけにはいかなかった。

この状況……三人の女の子に迫られているという事態に対応するためにも。そして、愛乃を守るためにも。

そんなとき、玄関のチャイムが鳴る。

（こんな朝早い時間に誰だろう？）

透が立ち上がり、出迎えようとする。

以前、真衣が突然押しかけてきたことがあったが、まさかまた来たのだろうか。

あるいは透たちの後見人、近衛家秘書の時枝冬華か。

だが、玄関に向かう途中、そのどちらでもないことに透は気づいた。

来客はすでに玄関へと上がりこんでいたのだ。

ぎよっとする。知らない少女がいた。

赤色の美しい和服姿だ。少し年上だろうか。

茶髪のおふわふわしたロングヘア。おっとりとした雰囲気だが、整った目鼻立ち。

知香とは違ったタイプだが、いかにも上品なお嬢様という印象だった。包容力も感じさせる

し、ついでに胸がすごく大きい。

彼女は優雅に頭を下げる。

「初めまして。わたくし、豊臣梨々華と申します。講文館高校の二年生です」
なるほど。先輩なのか。

だとしても、ここにいる理由が理解できない。

「えつと……玄関、鍵がかかっていますませんでしたか？」

「あら、そのことなら合鍵をいただいているので」

「へ？」

なぜこの家の合鍵を持っているのだ、と透は疑問に思う。

考えられるのは、彼女が近衛家の関係者ということだ。

豊臣、という名字も引つかかる。

梨々華はにつこりと笑った。

「連城透さん。わたくしは貴方の新しい婚約者なのですから」

爆弾発言に透はぼかんとした。

（新しい婚約者……？）

透の婚約者は愛乃だ。それはそもそも近衛家が決めたこと。

それなのに、新しい婚約者と名乗る少女がこの家の合鍵を持っている。

透は慎重に言葉を選ぶ。



「それは誰が決めたことですか？」

「もちろん、近衛家のご当主です。わたくし、豊臣エレクトロニクスの娘ですから、連城さんの婚約者としても釣り合いが取れています」

豊臣エレクトロニクスといえば、名古屋に本社を置く東証プライム上場企業だ。電子部品メーカーで、連結売上高は一兆円を軽く超える。国際的な大企業だ。

創業者の豊臣一族による同族経営であり、豊臣エレクトロニクスの経営者一族は、白壁しろかべに本邸があるから、白壁豊臣家と呼ばれている。

近衛グループとも同格と言ってよい名門なのは確かだけれど。
しかし、わからない。

「俺の婚約者は愛乃・リュティさんです。それは近衛家が決めたことです」

「あら、まだ話が届いていなかったのですね。その話は破談だと聞いています」

「そんなわけが……」

そこに愛乃が慌てて飛んでくる。なぜか新聞紙を持っていた。

愛乃はちらりと梨々華を見たが、それよりも衝撃的なことが新聞に載っていたのか、透に「こ、これ……」と言いながら紙面を見せる。

その紙面には、「リュティ・グループの日本法人を、近衛グループが支援する経営再建は断念」という記事があった。

もともと透と愛乃の婚約は両家の政略によるもの。リュティ家の企業が経営難に陥っていて、

近衛家が吸収するためのものだった。
だが、その前提が崩れたのであれば、近衛家が透と愛乃の婚約を帳消しにしてもおかしくない。

そして、豊臣梨々華という少女が、透たちにとつての刺客というわけだ。

梨々華は嬉しそうにふふつと笑い、豊かな胸に手を置く。

「これでお二人は愛のない政略結婚から解放されるというわけです」

「俺と愛乃さんは愛し合っていますよ」

透がはつきりと言うと、愛乃が「と、透くんってば……」と顔を赤くして満更でもなさそうな表情を浮かべる。

だが、梨々華はピンとこない様子だった。

「でも、お二人は家の事情で婚約しただけなのですよね？」

「豊臣先輩でしたっけ？ 先輩も政略結婚で俺と結婚するわけですよ。なら、変わらないのでは？」

近衛グループと豊臣エレクトロニクスとの何らかの関係構築。それが新たな婚約の目的のはずだ。

そうであれば、梨々華の言っていることはおかしい。

透が純粋な疑問を口にする、梨々華は首を横に振った。

そして、満面の笑みを浮かべる。

「わたくしは連城さんを愛していますわ。とてもとても深く」

「へ？」

透は理解が追いつかず、固まってしまう。

この出会ったばかりの先輩は、何を言っているのか。

くすりと彼女は笑う。

「出会ったばかり、ではないのですよ？」

「あの……すみません、どこで会ったか覚えていなくて」

梨々華は気にしたふうもなく、「そうでしょうね」とつぶやく。

「ですが、わたくしは貴方にお会いしたことがあります。そして、貴方を夫とするのはわたくし自身の意思です」

はつきりとした宣言に、透も愛乃もあつけにとられる。

つまり、透と愛乃の婚約は解消され。

この豊臣梨々華というお嬢様と透は結婚することとなり。

そして、梨々華は透のことが大好きなようだった。

愛乃があわわと口を手で押さえ、つぶやく。

「これは……ピンチかも」

ピンチどころか、絶体絶命の危機だと思う。

透と愛乃がいくらお互いを強く想っていても、あくまで近衛家の意向あつての婚約だ。

それが解消されれば、そもそもこの同居生活自体が破算ということになる。

透はとりあえず目の前の梨々華を説得してみることにした。

「俺と愛乃さんの婚約はたしかに近衛家が決めたことです。でも……今の俺にとって愛乃さんは大事な人で、恋人でもあります。俺の婚約者は愛乃さんなんです。だから、すみません。俺は豊臣先輩と結婚するつもりはないですよ」

目の前の少女がものわかりがよければ、上手く近衛・豊臣両家を納得させることができるかもしれない。事情を理解すれば、梨々華も強引に透と結婚しようとは思わないだろう。

そして、豊臣家が娘を大事にしているなら、無理な婚約を進めようとは思わないはずだ。

けれど、梨々華はふふつと笑った。

「ご事情は理解しました。そうですね、わたくしも強引な手を使いたくはないのです」

ものわかりがよくて、透はほつとする。もつとも、理由はよくわからないが、透を想っている相手の拒絶するのはつらいこともある。

ところが、梨々華はとんでもないことを言い出した。

「わたくしも貴方たちと同居します」

透と愛乃は顔を見合わせ、それから「ええええ!」と叫ぶ。

梨々華はにつこりと笑い、そして胸を張って見せる。愛乃よりも大きい胸がぶるんと揺れた。

「愛乃・リュティさんよりも、この豊臣梨々華の方が妻にふさわしい。数日も経てば、連城さんもそのことに気づくはずですよ」

☆

透はとりあえず、冷静になるためにシャワーを浴びることにした。

休日だというのに、まったく気が休まらない。

豊臣梨々華というお嬢様は、使用人たちに荷物を運び込ませ、あつという間に引越しを終えてしまった。さすが大金持ちのお嬢様だと感心する。

家具こそ足りないが、この豪華な家には余った部屋は多数あるので、ベッドなどを持ち込めば、もう一人住人が増えても簡単に対応できてしまう。

着々と外堀を埋められていて、透は怖くなった。もちろん、このまま勢いに押し切られるつもりはない。

知香も近衛家に抗議の電話を入れてくれている。ただ、近衛本家、それも当主レベルの決定なら、さすがに嫡子の知香でも決定を覆せないだろう。

だとすれば、透にどんな選択肢があるか。

愛乃を連れて駆け落ち……というのは現実的ではない。

そもそも愛乃の家の会社を、近衛グループが救済するという話がなくなつたのが原因でもある。愛乃の家の会社は経営難ではあつたけれど、近衛グループにとって、必要な経営資源があつたから、買取という形が予定されていた。

なのに、いまさら破談になったのは何があったのか。
可能であればその理由を探り、なんとか近衛グループへの吸収合併を進めたいところではある。

ただ、それは高校生の透にとっては難しいかもしれない。

時枝冬華にとりあえず連絡を取ってみよう。大人で唯一の味方が彼女なのだから。

そんなことを考えながら、透がシャワーで身体を流していると、突然、愛乃が風呂場に入ってきた。

バスタオル一枚を巻いただけの姿だ。

白い胸の上半分が見えていて、うっすら桜色の部分がちらりと見えている。

最初はこんなふうに愛乃が風呂場に入ってきたら慌てたものだけれど、もはや透も驚かなくなっていた。

何度も愛乃が透と一緒に風呂に入ろうとしたからだ。

ただ、慣れたかといえば、そうでもない。

(何度見ても、やっぱりほとんど裸の女の子がいるのは落ち着かないな……)

愛乃も顔を赤くして、「一緒に入ってもいい？」なんて上目遣いに言う。

そう言われると、駄目と言えるわけもない。

知香たちは怒ってしまうかもしれないけれど、透としても愛乃と一緒にいられるのは嬉しいことだから。

「いいけど、エッチなことは禁止だからね？」

「はい」

愛乃は素直にそう言って、透の背後に来る。

「背中、流してあげるね」

「ありがとう」

透は椅子に座り、愛乃に背を向ける。

愛乃なら胸を押し付けるぐらいのことは平気でするので、背中を流す程度は平和にも思える。

あまりにも自然すぎて、もはや夫婦みたいだ。

愛乃が透の背中を素手で洗い始める。その小さくて、繊細な手がとても心地よく透の背中とこすり合わされる。

「こうしていると、夫婦みたいだね」

「愛乃さんも同じことを考えていたんだ」

「あつ、透くんもわたしを奥さんだと思ってくれていたんだ？」

からかうように愛乃に言われる。いつも一方的に愛乃に迫られているのは男としても情けないし、たまには反撃したくなる。

「もちろん。婚約者だから、愛乃さんは俺の未来の妻だからね」

透は真面目な顔でそう言い切った。目の前の鏡は、透の顔を映している。少し顔が赤い程度で、冷静でいられていることに安心する。

愛乃は「ふうん」とつぶやいたが、表情がにやにやと嬉しそうなのが鏡で見取れる。やっぱり、愛乃は可愛い、と透は思う。

同時に、このままでは愛乃が透の妻となる未来はなくなってしまうという心配もある。

愛乃は問いかける。

「ねえ、透くんはわたしと結婚してくれるんだよね？」

「もちろん。今の俺は愛乃さん以外を婚約者にするつもりなんてないよ」

「ありがとう。でも、あの豊臣梨々華っていうお嬢様、優しそうだし、お金持ちだし、可愛いし、む、胸も大きいし……。透くんがあのお嬢様と結婚したくなったら、どうしようって心配になっちゃうの」

「愛乃さんは俺以外の人と結婚したくなる？」

「ううん。わたしの婚約者は透くん、たった一人だもの」

「なら、俺も同じだよ。心配なんてしなくていいのに」

「でも、透くんがそう思わなくても……。あのお嬢様が本当に透くんのことを想っているなら、わたしよりあの子の方が透くんを幸せにできるかもしれないって、そんなことを考えてしまうの」

たしかにあの豊臣エレクトロニクスの令嬢は、大多数の男からしてみれば、あらゆる面で欠点らしい欠点がなさそうだった。

それどころか、むしろ喜んで受け入れたいと思うだろう。容姿も家柄も非常に優れている。

だが、それは愛乃も同じだ。愛乃は学校で一、二を争うほどの美人だし、没落しているとはいえフィンランドの名家出身だ。

それに、そもそもそういう要素を取り上げて、透は愛乃を自らの意思で恋人に選んだわけはない。

「愛乃さんが愛乃さんだから、俺はいいんだよ。それに、愛乃さんは俺の力に、俺の支えになるって言ってくれたからね」

婚約者なら互いを支え合う。だから、透は愛乃を守るし、愛乃も透を支える。そう約束したけれど、愛乃は目を伏せる。

「わたし……。透くんの力になっているのかな。わたしは透くんを守ってもらえてる。婚約者になつてくれて、本物の恋人にもなつてくれて……。でも、わたしは透くんにも何もできていないんじゃないかな」

愛乃は話すのに集中していたのか、無意識にその手が透の尻に触れる。透が「ひやつ」と情けない声を上げると、愛乃が慌てて「ご、ごめんなさい」と言う。

「気にしないでよ。それより、愛乃さんがそばにいることが、俺にとっての力になるから」

「うん……」

愛乃はそう言われても、納得できなさそうな顔をしていた。

たしかに透が近衛家の一員として、愛乃と婚約することで、愛乃が他の男と結婚させられるのを防ぐことができた。

今も愛乃の希望に沿って同居している。透はそれだけで十分だし、透だって愛乃に十分に報いていないと思っている。

ただ、愛乃はそれだけでは満足できないみたいだ。

「わたしが透くんのためにできること……何だろう？」

愛乃がつぶやく。なんとなく愛乃の元気がない。

それは梨々華というライバルが登場し、しかも婚約者の地位が脅かされているのだから、当然かもしれない。

解決策はすぐには思いつかないけれど、愛乃を元気づけることはできるかもしれない。

透は突然立ち上がり、愛乃の方を向く。

愛乃が透の下半身を見て、「あつ……」と恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「愛乃さん……どこ見てるの？」

「ど、どこも見てないよ？ それより、なんで急に立ち上がったの？」

「愛乃さんを元気づけようと思って」

「へ？ あつ、ひゃうっ♡」

透は愛乃の胸の上半分を手で軽く撫でた。愛乃がくすぐったそうに身をよじる。

透の指が愛乃の乳房に沈み込むと、愛乃は「んっ♡」と声を上げた。

それから、彼女はうろたえたように潤んだ瞳で透を見上げる。

「エッチなことは禁止って透くん言ったよね？」

「でも、愛乃さんがしてほしそうだっただから」

「わ、わたし、そんなに淫乱でも痴女でもないもんっ！ あつ……♡」

「裸同然の姿で風呂場に入ってきているのに、その言い訳はできないんじゃない？」

「そ、そうだけど……ひうっ♡」

透の指が愛乃のタオルをずらし、その桜色の突起が見えてしまう。愛乃がかあつと顔を真っ赤にするが、透の指先が愛乃の乳首をいじる。

「ダメっ……あつ♡ あんっ♡ いやんっ♡」

透が愛乃の乳首をきゅっきゅっつつまむと、愛乃が甘く「ああああああつ♡」とあえぐ。女の子の匂いが透の脳を刺激する。

もしこのまま婚約破棄となれば、透は愛乃にもう触れることもできないかもしれない。

それなら、いつそそこで、愛乃の初めてを奪ってしまう手もある。そうすれば、既成事実ができて、二人の関係はより強固になる。

水無瀬真衣は透と愛乃がエッチをすることを禁じて、もし違反すれば婚約破棄に追い込むなんて言っていた。けれど、真衣とは和解しているから彼女ももう敵ではないし、そもそも婚約はすでに破棄されてしまっている。

なら、なおさら透がためらう理由はない。

愛乃が首をかしげる。

「透くん？ 目が怖いよ……？ あつ♡」

透の右手が愛乃の尻を撫で回す。さっきのお返しという意味もある。愛乃は「んんっ♡」と恥ずかしそうな声を出す。透を止めようとはしない。このまま、愛乃のバスタオルを完全に剥ぎ取り、浴場の壁に押し付けてしまえば……。透がそこまで考えたとき、突然、浴場の扉が開く。透は慌てて愛乃の身体から手を放し、愛乃はバスタオルを引き上げて胸元を隠そうとする。知香や明日夏たちが抜け駆けを怒りに来たのかと思ったら、扉の入口にいたのは梨々華だった。

湯浴み着というのだろうか。純白の浴衣のようなものを着ている。

そして、胸の谷間が大胆に露出していて、透をどきりとさせる。

彼女はふふつと笑う。

「あらあら、本当に連城さんとリュティさんは仲良しなんですね」

「な、なんで入ってきているんですか……？」

「わたくしも婚約者だから……というのはあまり行儀の良くない物言いですね。つまり、わたくしも『仲間に入れてほしい』ということです」

梨々華はにこにここと笑う。

普通、出会ったばかりの男と一緒に風呂に入ったりはしないだろう。

いや、梨々華の言う通りなら、透と彼女は以前会ったことがあるらしいが。

それにしても大胆だ。

透は怖くなってしまう。

愛乃がひしつと透の腕をつかむ。まるで透を渡さない、とでも言うように。

（む、胸が当たっているのが気になるけれど……）

さっきまで手で弄んでいたのだから、今更かもしれないが。

気になってしまう。というより透がエッチな気分になっているからでもある。

ぼんぼんとした悩ましい感触が、透の邪念をかき立てる。

なんとか透はその邪念を振り払うと、梨々華に向き合う。

「悪いけど、俺の婚約者は愛乃さんだし、豊臣先輩と一緒に風呂に入るつもりはないよ」

「わたくし……魅力がありませんか？」

シュンと悲しそうな表情をするので、透は反射的に「いえ、むしろ豊臣先輩は可愛いですし、だから困るというか……」と言ってしまふ。

そして、隣の愛乃にじーつと見つめられ、梨々華は嬉しそうな表情をする。

「単にお背中をお流しするだけですわ。何もやましいことなんてございません」

「だとしても、男女が一緒の風呂に入ったら、誤解されますよ」

「近衛知香さんや桜井明日夏さんとは何度もお風呂を共にされているのに？」

そう言われると、透は困ってしまう。

ただ、知香にせよ、明日夏にせよ、幼馴染であり女友達だ。赤の他人の梨々華とは違う。

それに、どうして知香たちとも一緒に風呂に入っていることを、梨々華は知っているのだろ

う。

梨々華はその疑問に答えてくれた。

「近衛さんからお聞きしたんです。二人は幼馴染なのだそうですね。元婚約者で最近仲直りして、今は近衛さんは連城さんのハーレム化計画を目指している、と」

短い時間で洗いざらい、知香が喋ってしまったことに透は驚いた。この分だと、過去の知香誘拐事件についても教えているかもしれない。

同時に、梨々華だけが風呂場に来ているのも気になる。知香が梨々華を制止しなかったのなら、何か理由があるはずだ。

この先輩女子は予想以上に手強いかもしれない。

透の中の警戒レベルが上がる。とはいえ、新たな婚約者だということで、透を強引に連れ去ったり、あるいは愛乃をこの家から追い出すつもりもないらしい。

だとすれば、透が彼女に靡かなければいいだけだ。そのあいだに時間を稼いで愛乃との婚約を元に戻す解決策を探すしかない。

梨々華は透の内心を見透かしたように、くすりと笑い、浴室へと一步を踏み出した。

湯浴み着の上からでもその大きさがわかる、メロンのような胸がぶるんぶるんと揺れて、透の視線が釘付けになる。

「と、お、る、くん？」

愛乃がじとこつちを見ていることに気づき、透は慌てて視線をそらそうとする。

だが、梨々華はシャワーの前に立つと、おもむろに上半身の湯浴み着を脱ぎ始めた。

白い乳房が露わになり、その先端も見えそうになる。それと同時に透の視界が塞がれる。後ろから愛乃が手で透の目を塞いだのだ。

「透くんのエッチ。他の女の子の裸は見ちゃいけないんだから」

「ご、ごめん。でも、今のは不可抗力……」

「透くんはわたしの裸だけ見てればいいんだから」

なかなかのパワーワードを愛乃が打ち込んでくる。

一方、衣擦れの音がして、梨々華が下半身の湯浴み着も脱いだのが想像できた。

「あら、残念です。連城さんに将来の妻の身体を確かめていただきたかったですけど」

「将来の妻はわたしなんです！」

愛乃が力強く抗議し、それから透の耳元に「行こう、透くん」とささやいた。

透は目を塞がれたまま、浴室の外へと歩く羽目になる。

だが、その途中にあるプラスチック製の風呂桶に透は躓いてしまう。

「わわっ」

「きゃあっ♡」

透は愛乃を巻き込む形でその場に倒れ伏す。

目を開けると、愛乃はバスタオルが剥がれ、一糸まとわぬ姿だった。十五歳の女の子にしては起伏のある身体が、透の目の前にさらされる。

「あっ……」

愛乃は恥ずかしそうに黙ってしまう。しかも、透の手は愛乃の秘所のあたりに偶然当たっていた。

透が手をどかそうと動かすと、まさぐるような形になってしまう。

「あんっ♡ 透くんっ、そこダメっ♡」

「ご、ごめん」

「あっ、ひうつ♡」

透の股間がびくんと大きくなり、愛乃の肌と触れ合う。

愛乃がかあつと恥ずかしそうにする。

梨々華がこちらにやってくるが、彼女はマイクロビキニのような水着を着ていた。

「わたくしが裸だと思っていました？ さすがにわたくしも淑女です。で、そこまではしませんでした。いまは、まだ」

どうやら、湯浴み着の下にマイクロビキニを着ていたようで、どつきりだったようだ。

ただ……。

「あの、先輩。一言だけよろしいでしょうか」

「？ どうぞ？」

「その水着も十分に……大胆すぎると思います」

以前、愛乃が買ったマイクロビキニといい勝負かそれ以上の布面積の小ささだ。

湯浴み着の下に着ていることがバレないようにするためには、極小面積である必要があったのだけれど……。

ヘタをすれば乳首が見えそうなくらいだし、うつすら乳輪が見えているような気がする。

透の視線に気づいたのか、梨々華はみるみる顔を赤くした。

一つ年上といっても、彼女も透と同じぐらいの少女なのだなと思う。

梨々華は無理をするように、挑発的な笑みを浮かべる。

「あら、連城さんもやつぱりわたくしに興味津々ですね。何ならわたくしの、お、おっぱいに触っても……」

その言葉を遮つたのは愛乃だった。愛乃はいつのまにか立ち上がり、透と梨々華のあいだに入る。

もつとも全裸のままなので、透の目に毒なのだけれど。

「透くんが見るのはわたし裸だけ。触るのもわたしだけです。豊臣先輩に透くんは渡さないんだから！」

愛乃が梨々華に対して、力強く言う。ここまではつきりと愛乃が言うのは珍しい。透はちよつと驚いた。

知香や明日夏に対しては、愛乃はむしろ仲間意識すらあるようだったのに、梨々華に対しては態度が違うようだ。

それだけ、梨々華を脅威に感じているのかもしれない。

梨々華はにつこりと笑うと、突然、愛乃の胸を触った。
「ひゃあっ？」

愛乃がびっくりして、素っ頓狂^{とんきやう}な声を上げる。梨々華は愛乃の下乳を持ち上げるように揉みしだいた。

「さすが北欧系……すごい大きいですね」

「そ、そういう豊臣先輩こそ……あんっ？」

素っ裸の愛乃が、同じく際どい格好の梨々華に胸を揉みしだかれている。美少女二人が絡み合っている様子はそそろといえそそろのだけれど……。

透は梨々華の手をつかんで、愛乃へのいたずらをやめさせる。びくつと梨々華が震え、透を見上げる。

「先輩。愛乃さんに触っていいのは、俺だけです」

愛乃が「透くん……！」と嬉しそうに言い、一方、梨々華は不満そうだった。

透はバスタオルを拾い、愛乃に被せると、愛乃の手を引いて浴場の外へと出る。

その後から梨々華が声をかける。

「いづれ、わたくしが連城さんを取り戻してみせますわ」

取り戻す、という言葉に透は引っかけかりを覚えた。つまり、かつて透は梨々華のものであった。

梨々華がそう認識しているということだ。

だが、考えても仕方ない。少なくとも愛乃の目の前では、梨々華は手の内を明かさないう。

う。

二人きりのときに直接尋ねてみるしかない。

透はそう考えて、風呂場を出た。

愛乃はむうつと不満そうだった。

「あの先輩、わたし、苦手かも……」

「ちよつと変わった人みたいだよ」

「せつかく透くんと二人きりだと思っていたのに」

そして、愛乃はいたずらっぽく瞳を輝かせ、「次はもつとエッチなことをしてもいいよ」なんてささやいた。

☆

シャワーを浴びた後、透たちは外へと出かけることにした。今日は休日なのだ。

梨々華はさすがにまだ引越準備をしないといけないので、外出はできない。

ちよどよい。愛乃、知香と今後の作戦会議をするのにはびたりだった。ちなみに明日夏

は友達と遊ぶ用事があるということで、残念そうにしていたけれど不参加。

明日夏は社会的かつ人気者なので、仕方がないだろう。知香も生徒会や女子バスケット部で忙しい

はずなのだが、都合をつけたらしい。

愛乃、知香と一緒に青色の市営バスに乗り、名古屋駅へと向かう。
二人とも気合の入った私服姿で、かなり目立つ。透は美少女二人に挟まれた男……という感じだ。

休日だけれど、かなりバスは混んでいた。名古屋の繁華街、栄も近いし、人の多いエリアだからかもしれない。愛乃の後ろに透が、その後ろに知香が立つ。

知香が後ろから透に言う。

「実はね、私、あの豊臣梨々華っていう子のこと、知っているの」

愛乃が感心したように「へええ」と言う。

「やっぱり名家同士の付き合いがあるんだ？」

「ええ。白壁豊臣家は名門だもの。もともとうちの那古野近衛家は京都の公家、元公爵家と明治に別れた分家なの。だから名古屋にいる歴史は浅いのね。けれど、白壁豊臣家は尾張徳川家の家老だったから」

江戸時代に名古屋を支配していたのが、武士の尾張徳川家だ。あの徳川康の子息が名古屋に大名として封じられたことに始まる。

梨々華の属する白壁豊臣家はその年寄、つまり家老だった名門だ。あの有名な豊臣秀吉の妻、高台院の末裔にあたる。江戸時代は名字は木下を称したが、明治維新後に豊臣に改め、男爵となった。その一門の人間が実業家となり、白壁豊臣家として別家を立てたのが梨々華の家だった。

透は両家の歴史をまとめる。

「ざっくり言えば、近衛グループはよそ者の公家で、豊臣家は名古屋に昔からいる武士、という感じがかな」

知香がうなづく。

「もともと那古野近衛家と白壁豊臣家は水と油。ずっと対立してきた歴史があるわ。その歴史を終えるために、今回の婚約は考え出されたのかも」

「それにしても、近衛家も勝手だよ。突然、俺に愛乃さんと結婚しろと言ったり、今度は豊臣先輩と結婚しろと言ったり……」

「その前は私の婚約者だったわけだしね」

知香が自分も婚約者だったと強調する。知香の誘拐事件さえなければ、今でも透と知香は婚約者だったはずだ。

それが思えば遠くまで来てしまった。

「それにしても、なんで俺なんだろう。近衛家には他にも男はいるはずだよ」

「それは理由があるというか、透も梨々華先輩とは会ったことがあるからでしょう」

「それがわからないんだよ。まったく思い出せなくて……」

「うちが主催のパーティーなんていくらでもあったでしょ？ 両親に連れられて、豊臣梨々華が参加していてもおかしくないでしょう」

言われてみれば、それはそうだ。中学生の途中まで、透は知香の婚約者として、近衛家の後

継者候補だった。パーティーでも近衛家の人間として、チャホヤされていたと思う。

もつとも、透は両親に見捨てられていたし、どこかよそ者という感触は拭えなかった。そして、知香との婚約破棄後は近衛の屋敷からも追い出されてしまったわけだ。

ともかく、近衛家と豊臣家に交流があったのなら、透はどこかで梨々華に会っていてもおかしくない。

ただ、それだけのことだろうか。一度会っただけで、あれほど梨々華が透にグイグイ来るのは理解できない。

もつとも透を愛しているというのは建前で、本音では透を利用しようとしているのかもしれないが。

そう考える方が自然ではある。

そのとき、観光客らしき集団がバスに大量に乗り込んできた。

入口から乗客が押し込まれ、透たちも奥へと追いやられた。ぎゅうぎゅう詰めなので互いの身体が密着する。

透の下腹部が正面から愛乃の下半身に当たり、愛乃が「ひゃあつ？」と小さく声を上げる。

「と、透くん……」

「わ、わざとじゃなくて不可抗力だからね？」

「わ、わかつてるけど……」

お互い正面から向かい合っているし、表情もばつちり見えてしまう。愛乃は頬をほんのり赤

く染め、透を上目遣いに見る。

さらに圧迫され、透の胸板と愛乃の乳房がこすれ合う。

「ひゃうっ♡ んっ……♡」

柔らかくぼよんとした感触に透はくらくらとする。愛乃は「ううっ」と目を伏せる。

その反応が可愛くて、もし二人きりだったら……と透は想像してしまう。風呂場での愛乃の裸姿が脳裏によぎる。

愛乃がうろたえたように「あつ……♡」と小さなあえぎ声を上げる。透の股間のものが大きくなって、愛乃の股のあたりを刺激してしまったみたいだ。

「こ、こんなところでダメだよ……あうっ？」

恥ずかしがる愛乃が金色の髪を振り乱し、びくつと震える。その姿を見て、透はますます愛乃に欲情してしまう。

しかも、背後にいる知香も他の乗客から押されたのか、その豊かな胸を透の背中に押し付けていた。

「ちょ、ちよつと。透、どいてよ」

「混みすぎていて無理だよ……」

「だ、だって、私のおっぱい、透に当たっちゃってるよね？ ね？」

知香が上ずった声で言う。愛乃以上の暴力的なサイズの乳房が透の背中にぎゅつぎゅつと押し当てられている。その柔らかい感触と、知香の女子特有の甘い香りに透はますます邪念を抑

えられなくなった。

そのせいでますます透の股間のものが大きくなり、愛乃の下腹部とこすれ合う。

「ひゃあっ♡」

「愛乃さん、こ、声を抑えて……」

「と、透くんのおち○ちんのせいだよ」

「ち○ちんとか声に出して言わないでね!」

「だって、事実だもん。んんっ、あつ……お、おっぱいもこすれちゃうっ♡」

愛乃はなんとか密着状態から抜け出そうとするが、かえって透の胸板と自分の胸をこすり合わせる形になり、そのせいで敏感に感じてしまっているようだった

愛乃はふふつと笑う。

「やっぱり透くん、エッチだ……」

背中からも知香が「透の変態……あつ♡」なんて甘い声でささやく。

あまりのことに透は動悸が激しくなってきた。

しかも、愛乃は密着状態から抜け出したのに、いたずらっぽい笑みを浮かべた。

そして、手で透のものを握る。

「あ、愛乃さん、それは……」

「ふふっ、透くんの本当に大きくなってる」

優しく愛乃の手が透のものを包み、透は困惑した。大きくなったものを愛乃は小さな指先で

刺激していく。

「ちよつと面白いかも……」

愛乃は興味津々といった様子だった。

このままだと透が限界にきてしまう。暴発するか、愛乃に襲いかかつてしまうか……。

さすがにバスの車内でそれはまずい。

幸い、ようやくバスは名古屋駅の名鉄バスターミナルに到着した。

どつと降りる人の流れに押され、透、愛乃、知香の三人はバスから出た。

透は愛乃と知香の顔を見比べた。二人とも顔が赤い。

愛乃がくすりと笑う。

「続きは家で、だね」

知香が呆れ返った様子で、「家でも禁止だからね」と言った。

それから透たちは建物を出た。

愛乃がきよろきよるとあたりを見回しながら、ささやく。

「このあたりのビルもそろそろ無くなっちゃうんだよね」

「リニア開通に向けて、再開発が進んでいるからね。ここは世界初の本格的バスターミナルらしいし、隣の近鉄バッセもル・コルビュジェの弟子が設計した貴重な建物らしいけど……」

周辺のビルは一斉に取り壊し予定だ。すでに名鉄レジャックは閉鎖している。

「街も人も変わっていくわね。もちろん、私たちも」

知香がつぶやいた。

現実には、豊臣梨々華の登場で透たちの生活は脅かされている。そして、いずれ透たちは高校生ではなくなるのだ。

「なんとかして、豊臣先輩との同居を解消しないと」

透の言葉に知香は首を横に振った。

知香が「私はね」とゆつくりと言う。

「反対ではないの。豊臣梨々華先輩が、私たちの家に住んでもいいんじゃない？」

透も愛乃も「えっ？」という顔で知香を見てしまう。

知香は落ち着き払っていた。

「冷静に考えてみた方がいいわ。冬華さんに聞いたのだけれど、彼女でもひっくり返せないぐらい、透と豊臣先輩の婚約は近衛家上層レベルで決められているみたい。だったら、私たちはどうしたらいいと思う？」

「豊臣先輩を味方につけた方がいいわけか」

「そのとおり。無理に追い出したら、かえって面倒なことになるでしょ？ それより一緒に住んで、親睦を深めて、私たちの味方になってもらう。そうなれば解決策が見えてくるかも」

たしかに知香の提案には一理ある。時間をかけて梨々華を仲間にすることは不可能ではない。仮にも梨々華は透のことを想ってくれているのだから、その可能性は低くないのだ。

けれど、愛乃は気乗りしない表情を浮かべた。

「わたし、あの先輩、苦手なの。それに……仲良くなっても、わたしとあの先輩で譲り合うことはできないよ」

透の恋人、婚約者、未来の妻。その地位に座ることができるのは一人だけだ。そうであるなら、どれだけ愛乃と梨々華が親しくなっても、共存はできない。

ただ、知香にとっては話が違う。

知香が進めるハーレム計画では、知香は愛乃や明日夏とともに、透とずっと一緒にいることを目的にしている。

それなら梨々華一人が増えたところで、計画に大差はない。むしろ愛乃が圧倒的な地位にいない方が都合が良いとすら言えるわけだ。

愛乃もそのことには気づいているようだった。

「でも、わたしは透くんはもちろんだけど、知香ちゃんと三人で仲良く一緒にいたいのに」

愛乃はいじらしく、そんなことを言う。知香が赤面して、「もうっ」と満更でもなさそうな表情をする。

愛乃と知香は恋敵でもあるけれど、いつのまにか親友同然になっていた。

愛乃としても知香が一緒の家にいるのは嬉しいことらしい。もちろん、それは愛乃が婚約者で、恋人だという前提の上でだけれど。知香と違って、梨々華がいるのは愛乃にとってはかなりのマイナス要素のようだ。

長期的に見たとき、どうすればよいか。

透は愛乃と知香を眺め、少しためらってから言う。
「えっと……二人とも俺が守るから、安心してよ」

ちよっと驚いた様子で愛乃と知香から見つめられ、透はどきまぎする。少し柄でもないことを言っただけかもしれない。

けれど、愛乃は優しく微笑み、知香は照れたような表情を浮かべた。

「頼りにしてるね、透くん」「透も……格好良くなったわよね」

案外、二人からの評価は悪くなかったのだ、透はほっとする。

というより、二人とも透のことを好きでいてくれるから、悪く思わないのかもしれないけれど。

さて、と。そんなことばかり考えている場合ではない。

今日の透たちは遊びに来たのだから。

人混みの中を歩き、駅前の超高層ビル・ミッドランドスクエアにある映画館へと向かった。

近衛家が株主なので、株主優待で無料で見ることができる。

「それでお目当ての映画って、何だっけ？」

透が愛乃に尋ねる。

今日は愛乃が映画を見たい、というので名古屋駅に来たのだった。

透も知香も、愛乃の意見で動くことが結構多い。透にとつて愛乃は恋人だ。知香にとつても愛乃は親友だし、知香は愛乃には非常に甘いのだった。

愛乃がにこにここと笑う。

「あのね、時代ものの恋愛映画なの。大正時代の華族のお姫様が主人公で、かつこい年上の男の子に助けてもらうの」

「助けてもらうってことは、何かピンチに陥るってことだよな」

「政略結婚させられそうになって、代わりにヒーローの男の子に婚約者になってもらうの」
愛乃の説明に、透と知香が顔を見合わせる。

まるで透と愛乃のこのようだ。

愛乃がふふつと笑う。

「わたし、けっこう恋愛映画、好きなの。少女漫画もよく読むし」

「ミステリとかサスペンスとかだけじゃないんだ？」

「そういうのも好きだけど、わたしも女子高生だもん」

なぜか愛乃はえへんと胸を張る。

実は知香も少女漫画は嫌いではないはずだし、透も異存はない。

ただ、男一人＋女二人（しかも美少女）で恋愛映画というのはけっこう目立つかもしれない。

（まあ、気にしたら負けか……）

そもそも美少女三人、いや、梨々華も入れれば四人と同居しているのだから今更そのぐらいおかしいことはないかもしれない。

プレミアムシートという特別料金を払う席を透たちは確保した。近衛家のおかげでできる贅

沢だが、近衛家に振り回されているのだからこれぐらいは許されるだろう。透が真ん中に、愛乃、知香が両隣に座る形になる。

ポップコーンとドリンクも持ち込んでいて、準備は万全。

まだ映画は始まっていないから、透の肩越しに愛乃、知香がいろいろ楽しそうに話している。この二人は本当に気が合うみたいだ。

ただ、梨々華がそうとは限らない。それに明日夏も知香のライバルだし、愛乃とそれほど親しいわけでもない。

考えてみると、知香のハーレム計画に乗ったとしても、前途は多難だ。

やがて上映開始となる。

内容はこてこての恋愛映画だが、大正時代が舞台ということでそのあたりの描写は凝っている。

当時は結婚相手は家が決める、ということが普通にあったけれど、今の時代、そんなことは普通はなくなっている。

だが、透はたまたま近衛家の血筋を引いて生まれたから厄介なことになっているのだ。もつとも、そのおかげで愛乃と恋人になった面もあるのだけれど。

冬華が言う通り、自由になるには近衛家に乗っ取り、当主になるぐらいの気概が必要そうだし、いつのまにか、知香は眠ってしまっていた。生徒会活動や部活で忙しいから寝不足なのかもしれない。

それはいいのだけれど、知香がやすやすと寝息を立てながら、透にもたれかかったのでできりとする。

ふわりとした甘い匂いが、透の鼻腔をくすぐる。

見下ろすと、知香の無防備な胸が見えてしまう。至近距離に美少女がいるのは心臓に悪い。

愛乃が透と知香の様子に気づいたのか、くすりと笑う。そして、愛乃もわざと透にしなだれかかった。

ちょうど映画は盛り上がるシーンで、ヒロインのお転婆くるね華族令嬢が、年上のヒーローに強引にキスをするところだった。

愛乃はそれを見て、目を輝かせていた。

そういえば、いまだに愛乃とキスはできていないのだ。

愛乃が期待するように透を見つめる。

だが、知香がいつ起きるかわからない状況で透は愛乃にキスをする勇氣はなかった。

心の準備もできていないし。

愛乃もそれがわかったのか、ふふつと笑う。ほぼ同時に知香は目が覚めたのか、びくつと震え、こちらを見る。

それから、はつとした表情で透を見た。寝てしまつて、ついでに透にもたれかかっていたのが気恥ずかしいのだろう。

透が気にしていないよ、と微笑むと、知香は顔を赤くした。

そんな透と知香を、愛乃は優しく見つめていた。
やがて映画は終わった。

透たちは近くの中華料理店へと移動する。担々麺が有名なシックな雰囲気のお店だ。

担々麺を待つ間、知香が憤慨したように言う。

「あの話、ぜったいヒロインはあの年上男性じゃなくて、幼馴染の男の子とくっついた方が良かったと思うわ」

「それ、知香ちゃんが自己投影しているからじゃ……」

愛乃が言うと、知香が「そ、そんなことないもん！」と言う。愛乃の前だと知香は口調まで可愛らしくなってしまうので、透は思わず微笑ましくなる。

だが、透の表情の意味を知香は誤解したらしい。
むうっと知香は頬を膨らませる。

「透は私に反対なの？」

「え？ いや、そういうわけじゃないけど、お話的にはあの年上の男キャラと恋愛するのが自然だったような……」

「……透の裏切り者」

知香は唇を尖らせて、そんなことを言う。

愛乃は「面白かったねー」と映画に大満足の様子だった。

やがて、注文した担々麺が運ばれてくる。

胡麻の香りが高くて、美味しそうだ。

愛乃も知香も意外とラーメンや辛いものは大好物なようだった。

ついでに杏仁豆腐も頼みである。

透たちは紙エプロンをつけて、ふうふう冷ましながら、熱々の担々麺を食べ始める。

愛乃が箸で麺をすくい、みずみずしい赤い唇をつける。その姿が妙に妖艶で、美しく感じる。

透が思わず見惚れると、愛乃が視線に気づいたのか、照れたように笑う。

「もうっ、透くんってば、エッチなことを想像してたの？」

「担々麺でエッチなことを……？」

「透くんなら、考えてもおかしくないかなって」

「愛乃さんは俺を何だと思っているのさ？」

「わたしのことを大好きな男の子、かな。なんてね」

愛乃がくすくすつと笑うが、顔が赤い。担々麺が辛いからだけではなさそうだ。

知香がむむつと愛乃をジト目で睨む。

「食事中は食事に集中するのがマナーでしょ？」

「好きな人と一緒に食事をしているのに、食事だけに集中するなんてもったいないよ」

そんな照れてしまうようなセリフを、今日の愛乃はだいぶ直球で言う。

梨々華の登場が愛乃を焚き付けているのかもしれない。

だとすれば、愛乃とキスをして……その先も、もしかしたら遠くない未来だと透は期待した。

とはいえ、すべてが順調に進むとは限らないのだけれども。

